

# ある男の気がかり

牧草 泉

桂一郎は会社を定年退職した。平凡な会社勤めをしてきたが、このことについて後悔はない。

人生には不可解なことが多い。それを解決しようとすれば、それなりに勉強して問題点を把握し、検証し、考察して判断しなければならぬ。しかし人生は有限だ。彼はそんなことに時間を費やすなんて愚かなことだと思っている。だから、村上春樹作品の主人公のように、立ち止まることはせずに、歩きながら、ほどほどに悩み、問題をほどほどに解決していく。人生はそういうものだと思っていた。

でも、彼には高校時代から一つ気になっていたことがある。それがこの期に及んでも、まだ未解決なのだ。若いとき友人に話したら、その友人は一瞬きよんとんととして、やがて言った、「何だって、そんなこと、お前は考えているの？ どっちだっかっていいじゃん。そんな時間があつたらもつと自分のことを考えるんだよ。お前の生き方って、誰が見てもダサイよ」と言っつて、笑つた。

その気になつていふことは、文学賞の選考委員がほと

んど物書きであること、である。物書きが、物書きを選ぶということに矛盾を覚えるのだ。これはヤラセではないのか？ という疑問が消えない。彼のこの疑問は未解決のまま実に延々と六十年の歳月が流れてしまったことになる。その間選考委員は、入れ替わりはあつても既成作家が主要メンバーであることは何も変わっていない。

二〇一二年下期の選考委員を見ると、小川洋子、奥泉光、川上弘美、島田正彦、高樹のぶ子、堀江敏幸、宮本輝、村上龍、山田詠美の九名となつていふ。このうち七名が芥川賞受賞者で一名は直木賞受賞者、島田正彦ははずれの賞も受賞していない。もつとも賞をもらったかどうかはそれほど問題ではない。山田詠美、島田正彦も芥川賞にノミネートはされたことがあるんだし、他の賞をもらつていふから。ただし、桂一郎の判断からすると「光抱く友よ」は百パーセント直木賞作品ということになる。彼のこの両受賞作品の判別法は、直木賞受賞作品は寝転んで読む、芥川賞受賞作品は机に向かつて座つて読む、そんな雰囲気があつた。彼はこれで区別してきたのだ。ところが「光抱く友よ」は寝転んで読んで結構面白かつた。「あれっ」と思つた。そのとき以来、彼は両受賞作品が近似してきていふと思つていふ。そう言えば、『風の歌を聴け』が芥川賞にノミネートされたことも意外だと思つたことだつた。

山田詠美は一九八七年に直木賞受賞、高樹のぶ子が一九

八四年に芥川賞受賞。これつて逆が正しいんだ、山田詠美がどうして直木賞なんだよ？ と思つたことだつた。

彼はこの事実から、選考委員が何の基準も持たないで、自分の好き嫌いで選んでいふのでは？ という疑いを感じていふのだ。

彼は、少なくとも文学賞を選ぶには、既存の作家は選考委員の二十パーセントから三十パーセント止まりであるべきだと思つていふ。例えば選考委員が十名とすると、そのうち作家は二名ないし三名でいい。主催出版社から編集部関係者の選考委員は許容できる。編集長などであろうから作品の評価能力は十分持つていふはずだ。また相当な資金をつぎ込んでいふから？ 読者代表も必要だが、これは候補選びが難しい。そこで、あとは文芸評論家を六名か七名を加える。これでいいと思つていふ。これは、物書きは非常に感情が不安定で、病的に好き嫌いが激しく、情的に物を見る傾向が強く論理的ではない、つまり判断能力が心的情緒によつて劣化して大いに曇るからという理由による。また、直木賞、芥川賞の個性をもつと明確にする必要があるからだ。

太宰治が、芥川賞ほしさに、川端康成に土下座したというエピソードがあるが、この太宰の行為についても、彼は次のように解釈する。太宰は彼自身も、非常に好き嫌いが激しいことで有名だつた。いつも知人と会えば喧嘩してい

たというエピソードを残していふ。太宰自身が、自らを省みて、「物書きはほとんどが非常に情緒不安定で、情にほだされやすく、好き嫌いで人間を判断する。だから、選考委員の情にすがつた方が得策だ」と思つていふ。つまり太宰は物書きの性格を正確に検証して理解してつたのだ、と桂一郎は思つていふ。

古い話になるが、船戸与一が二〇〇〇年に百二十三回直木賞をもらった。福田和也は彼の作品に対して二十点しか評価してない。ところが彼は直木賞に選ばれた。福田は彼が受賞する前に言つていふ。「たぶん、船戸与一は受賞するだろう」と。つまり、この一文には、選考委員が福田の二十点の評点に敏感に反応して、意固地になつて情的心情に駆られ、闇雲に？ 船戸与一を選定するだろう、というニュアンスがかぎ取れた。桂一郎も、福田のこの予言？ は正しいと思つていふ。以前は直木賞と芥川賞の違いは歴然としていふ。やはりこの違いは、ある程度きちんと棲み分けをすべきで、読者は、芥川賞で純文学を堪能して自らの人生を省み、直木賞で大衆小説を楽しみたいのだ。

韓国の李箱文学賞（二〇〇八年）を見ると小説家三名、文芸評論家二名（いずれもソウル大学教授）となつていふ。じゃあ、アメリカはどうなつていふんだ？ うん？ ノーベル文学賞はどうなんだ？ 村上春樹は？？ もしや？ 気分を選んでいふ？ と桂一郎の悩みは尽きない。